

平和とは

東石山中学校 黒澤 幸姫

平和とは何か、考えたことはありますか？

私たちはずっと平和な世界を望んでいるはずですが。しかし、平和とは何かと問われると、途端に考え込んでしまいます。私はその問自問自答せずに広島へ向かいました。私にとってこの研修は、平和について深く、強く考えさせられ、目や耳、頭に焼きついて離れないものになりました。

一日目、平和記念公園訪問後、親が被爆している人を指す被爆二世の方から、切明さんの実体験のお話を聞きました。そのお話は、教科では表せない、なんともリアルなお話でした。自分の友を自らの手で焼かなければいけない。想像するだけでも胸が痛く、泣きそうになりました。「お母ちゃんを探して」とズボンの裾を掴みながら怪我をした女の子が頼んだそうです。しかし、切明さんはその願いを叶えられなかったので、「わかった」と嘘をつきズボンを離すよう促したそうです。切明さんは、自分を嘘つきだと責め、今でもズボンを掴まれている感覚があるそうです。

二日目広島に原爆が落とされた日です。平和記念式典に参列し、原爆投下時刻の八時十五分から一分間黙祷を捧げました。小学生二人が平和な未来を力強く呼びかけていることが印象的でした。その後ワークショップという場で初めて、平和について、真剣に考えました。私はすぐに答えを出すことができませんでした。一緒に研修に行った仲間と意見交換をし、多くの意見が出ました。その中でも印象に残った「愛」という意見、「愛があれば平和になる」という意見です。その後、被爆証言者のお話を聞きました。広島ではなく、長崎で被爆した方でした。長崎に落とされた原爆は広島と種類が違うことや、目を背けても同じ悲惨な光景が広がっていたことなど、広島と似ているようで違うお話も聞きました。その後、灯籠流しをしました。原爆投下当時、熱さに耐えきれずに身を投げ出した人々でいっぱいだったと言われる元安川に、今を生きる広島の人をはじめ、外国人や私たちのような中学生などの願いが川に、鮮やかな光を灯していました。

三日目、平和記念資料館を見学した際、私は衝撃を受けました。ボロボロになった子供達の服。爆心地付近の温度は約三千度～四千度。その熱さに耐えきれず川に身を投げ出す人々の絵、懸命に救護活動を進める人々の写真など、とても胸が締めつけられました。見学している人の中には、涙を流す方もいらっしゃいました。資料館の中では、原爆が落とされた八月六日からその年までに亡くなった約14万人の方々の言葉や物語は、80年経った今でも生きて私たちに伝え続けてくれていました。その中でも印象に残った言葉、正子さんという方の、「怪我だらけになってもいいから帰ってこないかなあ」という言葉です。まだ中学生くらいの子供です。大人でさえ、その時は自分のことで精一杯だったはずですが。なのにこの子は、自分の怪我を嘆くのではなく、大切な人のことを考え、帰ってくることを、どんな姿でもいいから隣にいてほしいと願っているのです。私はその言葉に愛を感じました。そこで、前日の意見交換で出た「愛があれば平和になる」という意見が頭をよぎりました。昨日までは深く考えなかったその意見を、正さんは私に思い出させ、深く考えさせてくれました。他にも自分のことではなく大切な人たちを想う言葉がありました。